

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第17号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
所在地：〒690-8504
島根県松江市西川津町1060
島根大学法文学部 宮澤研究室
発行：2022年12月10日

常松正雄 先生 講演会 2022.09.10 (於 島根大学)



(常松先生の許可を得て、「ニューズレター17号」用に要約させていただきました。編集係)

出会いと人生

I. 学校

私は1930年11月12日に島根県簸川郡東村大字園(現・出雲市園町)に生まれました。1937年4月に東村尋常小学校に入学し、1943年4月に同高等科(尋常高等小学校)に入学しました。実は小学校を卒業してから松江中学に進学したいと思っておりましたが、父親がそれを許してくれませんでした。「お前は師範学校へ行け」ということになりまして、1945年4月に島根師範学校予科に入学しました。小学校入学から師範学校予科入学までの8年間は、まさに戦時教育のさなかでありました。その後、1948年4月に島根師範学校本科に入学し、そのあくる年1949年7月には新制・島根大学教育学部に入ることとなりました。

II. 人生の目標(小学校の地理教師)

わが家にはいろんな地図がありまして、また本の中かの地図を見たりして、地図を「ただ見る」よりも地図を「読む」ことが大好きになっておりました。教師になっても地理と関係したほうがいいだろうと思って、将来は地理の教師になりたいと思っていました。

III. 島根師範学校予科生時代 (英語教師：村上壽信先生)

1945年4月に入学した島根師範学校予科は全寮制でありましたが、食事にはご飯はなく、かぼちゃやイモ類などを食べるひどい状態でありました。そんな中、寮の食料不足により同年8月15日(終戦)には、「帰宅命令」が出て、自宅から一畑電鉄で師範学校まで通うこととなりました。

師範学校に入りまして、びっくりしたことがありますけれども、師範学校の時間割のなかに、英語という授業が入っていました。と申しますのは、大東亜戦争、つまり太平洋戦争が始まって、敵国の言語である英語は学校で教えるはならないということで、もうとっくに、旧制の中学校や高等女学校では英語は時間割から外してありました。ところが師範学校に行ってみたらまだちゃんと時間割のなかに入っていて、それにびっくりしましたが、村上壽信先生とおっしゃる方が英語の単語の発音を教えてくださいました。最初から国際音声記号という例のeの逆さまの[ə]だとか、aがeとくっついた記号[æ]だとか、というような記号でもって発音を教えてくださいました。eの逆さまというのはみんな小指をちょっと噛んで、口の奥から息をだして「ア」と言ったらその音になるぞ、あるいは/æ/という音は「ア」と「エ」のくっついた音だから、それをくっつけてやればいいけれども、発音の仕方としては「エ」を先に言うておいて軽く「ア」という音をそえれば/æ/という音になるんだというような格好で、次々この国際音声記号を教えてくださいました。私には、英語の辞書を見て単語の発音をするときに、これが大変役に立ちました。

IV. 島根大学学生時代

1. 大学附属図書館

学生時代に頭に残っておりますのは、附属図書館です。いま大学の受付があります、そのちょっと入ったところに木造の建物の図書館がありまして、暗い建物でしたけれども、その玄関に入ってみますと、いわゆるカードボックスがちゃんと置いてありま

した。カードを引き出してみると分類別にちゃんと整理したカードがたくさん並んでおりまして、それまではあまり見たことがない専門の本の書名がずーっと収めてありました。そのなかで自分が興味のあるものを紙に書いて受付に出して利用するというように利用させていただいたのですが、こういう本がたくさんある図書館があるんだなあ、やっぱり大学だなあ、という気がしたものです。

2. 恩師（中尾功一、森亮、梶谷泰之、飯塚俊夫、佐川洋、佐川春水、Berthold Aronstein の諸先生との出会い）

当初、1949年7月以降、島根大学発足の最初の10年くらいはですね、教育学部の教官（国立大学は「教員」ではなくて「教官」と称していました）は、教育学と英語科教育法、国語科教育法とか学科だけを教える、そして文理学部の教官がその他の一般教育および専門教育をすべて担当する、というようになっておりました。授業は外中原と西川津と両方で行われておりまして、学生は一生懸命両方を往復しておりました。しかも今のようにスクールバスなんぞありませんから、学生たちはみんな自転車で一生涯懸命走って往復するということになります。だいたい当時はですね、午前2コマ、午後2コマと1日4コマの授業がありまして、昼の間はだいたい50分くらい休み時間がありますけれども、その午前・午後の2コマのあいだの休み時間は20分ばかり取ってあるのですが、その間に学生は自転車で突っ走って往復するんです。大変な学生時代でした。それでわれわれが卒業する前に、大学にスクールバスを作ってくれと交渉いたしましたが、卒業してから数年後にスクールバス化はようやく実現しました。

しかしまあ出会いということから申しますと、一番やっぱり私の人生で大事だったのは恩師との出会いでございます。まず、中尾功一先生というのは教育学部の先生ですが、英語科でただ一人の先生でした。私が3回生のときに赴任してこられましたが大変親切な先生でいろいろとお世話になりました。4回生の卒業論文の口頭試問も終わりました。「ああ、これからひと月くらいのんびりと遊べるなあ」と友達と話していたある日、この先生が、「常松君、来週の金曜日午前中、時間空けておいてくれ」とおっしゃったんで、何事かなあと思っておりました。当日になりまして、先生が「常松君、今日はね、出雲産業高校（現・出雲商業高校）というところへ行っ、校長の面接を受けるから一緒に行こう」とおっしゃって、ぎょっとしましたけれども従わざるを得ないので、普段着のまま先生に汽車に乗せられて出雲まで出かけて、出雲産業高校の山本龍一という大阪外語出の英語の校長先生の面接を一時間あまり受けました。まあ勉強のことやいろいろ聞かされて帰りましたが、中尾先生は「常松君、気長に1

週間くらい待ってろよ。そしたら返事がくるよ」ということで終わりました。そしたら、1週間ほどして「常松君、決まったぞ、君、あそこへ行けえ！」と言われました。当時は教員の採用試験などありませんし、適当に教育委員会が卒業生の名簿をもらって配置していた時代ですから、とくに高校の人事というのは校長が、ちょうど今のプロ野球の選手をピックアップするように、自分が狙った人物を、狙いをつけて交渉をして、それを教育委員会と交渉して決めるという裏がずいぶんあったようです。私も結局、山本校長先生に拾われまして、出雲産業高校に赴任するということになりました。

次に、文理学部の英文学科ですが、当時、英文学の先生が3人、英語学の先生が2人、それに事務助手が1人の計6人が、今のような個室ではなくて大部屋に皆さん一緒に入っておられました。机がこう6つ並んでいました。

まず森亮先生が当時主任でございましたが、森先生は英詩が専門の先生で、ラフカディオ・ハーンについてはほとんど授業をなさいませんでした。ただ私は卒業論文に、ジョナサン・スウィフトという作家が書いた、皆さんご存知の『ガリヴァー旅行記』を取り上げ、その研究をしようということに決めまして、森先生に「先生、卒業論文の指導教官になっていただけませんか」と申しましたら、「ああ、いいよ」とおっしゃってくださいました。それで研究室の先生のところへ行きましたら、「こんな大部屋では話はできんから、君、私の家に来なさいよ」とおっしゃってくださって、お言葉に甘えてかなり頻りに奥谷のお宅に通いました。卒論の話以外に、先生の研究だとか、ハーンの話だとか、自分が出した本の話だとか、あるいは最近書かれた論文を読ませていただいたり、いろいろと英文学あるいはラフカディオ・ハーンの文学関係のことをたくさん教えていただきました。だからこの先生は忘れることができない先生です。

梶谷延先生は私が3回生のときに、他の先生が転出された後に入って来られまして、気さくな先生でしたが、当時は「梶谷延」というお名前でした、「泰之」というのは私たちが卒業したずっと後に改名されたお名前です。先生は授業時間でも、ハーンが訪ねた松江市内の神社だとか仏閣だとかその他、直接学生を連れて行って、いろいろとハーンの話をしてくださいまして、大変いい勉強をさせていただきました。

もう一人、飯塚俊夫先生というのは京都大学出の非常にむっつりとした先生で、自分からお話はほとんどなさらない無口な先生で、学生たちはですね、「Never Smile」というあだ名をつけて呼んでおりました。この先生は英文学の講読を教えてくださいまして、いろいろと勉強させていただきました。この先生がある学期に、ラフカディオ・ハーンの『詩人論』というのを読んでくださいました。そのラフ

カディオ・ハーンの、いろいろな詩人の作品解説を読んでいるうちに、その解説が私には非常に気に入らして面白いなあと、英詩というものに対する関心が高まってきました。それと同時に、文学に関するハーンの他の作品も読むようになりました。ところで、自分はジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』というのを読んでいるのだけでも、ハーンはこの作家をどのように文学史で書いているんだろうかということで、文学史のジョナサン・スウィフトのところをちょっと読んでみたら、次のようなことを述べております。ハーンの英文学史というのは、現在恒文社というところから15巻の『ラフカディオ・ハーン著作集』が出ておりますが、その第11巻、12巻が英文学史となっております。その第11巻にジョナサン・スウィフトが出て参りまして、ハーンは、翻訳で読みますと、次のようなことを述べています。「彼[スウィフト]の長所も短所も、本質的にイギリス的である。だがそれは巨大な、驚くべき規模のイギリス人で、彼こそ十八世紀で一番すぐれた文学者だと言っても決して言いすぎではない。ジョンソンなどよりずっと大物だ」（『英文学史I』, 334）。サムエル・ジョンソンというのは、『英語辞典』というのを自分一人で作って出版したり、『シェイクスピア全集』を出版したりですね、当時18世紀のイギリス文学の大物だったんですね。それよりも大物だというハーンの評価ですから、これはちょっと齧ってみる必要があるなという気になりまして、結局、私は「ジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』の風刺の研究」(A Study of Ironies in *Guliver's Travels*)という題で卒業論文を行うことになって、森先生にお願いしたような次第です。

それから佐川洋先生ですが、先生は当時法学科の学生に時事英語を教え、授業で「ニューヨーク・タイムズ」を読んでおられました。非常に厳しい授業で学生達が恐れていましたが、英語の実力はものすごくある先生で、その後佐川先生とは大学の同僚となりましたが、先生には英語について非常に多くのことを教えていただきました。

また洋先生のお父上である佐川春水先生は、東京で「日進英語学校」を設立、校長として戦時中もご活躍され、「英語の神様」と呼ばれていましたが、空襲により多くの研究資料をすべて焼失され、終戦直後松江にお帰りになり島大の先生とされました。春水先生には、特に英作文の授業を受けました。俳諧や古典を始めとする日本文化あるいは中国古典について造詣の深い先生には、幅広い教養に裏打ちされた内容の豊富な授業を受けました。まさに、「英語の神様」の名人芸でした。そんな先生の授業を2年間受けたのちは、なんとなく、英語はこう書くんだなあとというのがわかったような気がしました。先生の一般英語の授業はすべて受講し、一番前の席に座って授業を受けました。先生には、みずか

らお作りになったその英作文指導ノートを15冊いただくこととなりましたが、その精密なご準備の様子を実際に見ることとなり深い感銘をうけました。ある時先生は、うちに遊びに来なさいよ、と言われ、南田町のお宅にしばしば伺うこととなりました。いろいろ英語に関するお話を伺って、お亡くなりになるまで、お付き合いをさせていただきました。お亡くなりになった折には、ご令息の洋先生と一緒にお骨拾いをさせていただきました。現在も、(ラフカディオ・ハーン研究会)前会長の吉川先生と一緒に、石橋町の順光寺にある佐川家のお墓に、先生の御命日前後に、お参りさせていただいています。

Berthold Aronstein 先生は、島根大学にお越しになられた最初の(フルブライト)外人教師で、非常にまじめで学生に対して指導熱心な先生でありました。奥谷の自宅に教育学部の若い教官を招いてフルブライトに向けた英語・英会話の指導をしておられました。私もその中に入れとおっしゃって英語の指導を受けているうちに、卒業年の4年の秋になって、「正雄、おまえもフルブライト(大学院)留学生試験を受けろ」と言われ、フルブライトに向けた英語の指導を受けることとなりました。

3. 活動

a) E.S.S.とAronstein先生

私がE.S.S.(英語クラブ)の会長をしているとき、たまたまAronstein先生が島大に来られたので、E.S.S.もAronstein先生の指導を受けたらいいだろう、ということになり、会長として先生にそのお願いにあげました。その時に、先生が私に教えてくださった英語がありました。「先生にものを頼むときにはね、“When would it be convenient for you?” というような言い方をするんだよ」と言われ、仮定法の文が敬語的な表現になるということを実地に学ぶこととなりました。

b) フルブライト大学院留学プログラム

フルブライト大学院留学プログラムには9つぐらいの分野がありましたが、私は「アメリカ文学及びアメリカ文化」の分野で受験しました。大学学部4年生から55歳の年齢まで受験可能でありました。書類審査、学科試験、Interview(面接試験)が課せられました。幸いなことに4回目の受検で合格することとなり、1956年9月に、フルブライト大学院留学生としてKent State University, Graduate Schoolに入学しました。

c) アメリカの大学院

(アメリカ文学講読：読書のスピード)

ケント州立大学では、院生用の寮に入らずに、わざと学部の学生と同じ寮に入れてもらい学生達との交流を図りました。3人部屋であり、私との会話

の時には十分理解可能でありましたが、アメリカ人学生同士が話すと俗語や学生言葉のせいで内容が理解できませんでした。ある日、アメリカ人学生から英語に関する質問が出て、次の英文の「直接目的語と間接目的語」を教えてくださいと言われて、やはり、母国語でも文法の知識はないものだなあ、ということを経験しました。

また、大学院の宿題の量の多さにはびっくりしました。日本ではせいぜいページ単位ですが、アメリカでは章単位の宿題が出ました。宿題に追われた私は、2人の学生が寝静まってから寮の廊下へ出て夜遅くまで勉強しました。そういう経験を経て、200ページ以上の厚い原書でも、それほど苦勞しなくてもなんとか読めようになりました。これは、私にとっていい宝物となりました。

V. 高校英語教師 (島根県高等学校英語教育研究会)

1953年3月に島根大学を卒業して、同年4月に島根県立出雲産業高校へ英語教員として赴任しました。ところが、行ってみますと学校の生徒は英語の授業なんてまともに勉強していないんです。だから、英語の授業はテキストが1ページ終わればいいほうで、まあこりゃ大変だなあ、いやあ一生懸命やらなきゃいかんなあと思いました。これが当時の実業高校の現状でございました。ところが勤めてから2年目に、山本校長が英語の先生ですから、県下の高校の先生に話しかけて、「島根県高等学校教育研究会」というのを作ろうという話をされ、「常松君、今度こういう会を作るんで、英語の高校の先生方が全部来られる。発会式をここでやるから、君、研究授業をやれ」と言われました。「先生、新米の教員がこんなことをやるものではないでしょう。先輩の先生方がいらっしゃいますから」。「いや君、こんなときはな、かえって新米のほうがいいんだぞ。君、やれ!」。校長命令ですから逃げられなくなりまして、やむを得ずやりましたが、やっぱりこっちはカチカチに上がりますし、生徒も固くなっておりまして、思うように授業は進みませんし、結局私も教科書1ページばかり終わったところで時間がきてしまいました。午後になって批評会というのがございまして、松江中学の、実業高校の現状なんか全然知らない先生に、「1時間1ページくらいの授業では授業にならん!」と大変ひどいお叱りを受けました。まあそういうことで次々と新しい経験をさせていただきましたが、自分も頑張らなければいけないなあという、まあ、後押しの言葉だと思って今日までやって参りました。

その後、1956年3月には島根県立出雲産業高校を退職し、同年4月、島根大学教育学部助手として採用されました。そして同年9月にフルブライト大学院留学生として Kent State University,

Graduate School に1年半留学することとなりました。

VI. 島根大学での仕事

1. 教育学部 (英語教育法担当 [島根県教員免許状取得必修教科の一つ])

1956年4月から1965年3月まで島根大学教育学部の教官となりましたが、教育学部では「英語教育法」の講義を担当したことが印象に残っています。この科目は、島根県英語教員免許状取得のための必修教科の一つであり、英語教員を目指す学生は誰もが修得する必要があるという科目でした。

2. 文理学部・法文学部 (アメリカ文学担当 [アメリカ文学セミナー、日本海宿泊セミナー、アメリカ文学卒業論文口頭試問])

1965年4月、島根大学文理学部(現・法文学部)の教官となりました。特に印象に残っているのは、当時、佐川洋先生と2人で「アメリカ文学科」の設立に努力したことであります。その後、アメリカ文学の講義を担当し、アメリカ文学セミナー、日本海宿泊セミナー、アメリカ文学卒業論文口頭試問などに携わりました。特に、当時の森田先生や市川先生と共に、春や夏の休み中に、学生達と海辺のお寺などに合宿し、昼間は自由に過ごし、夜はアメリカ文学セミナー(日本海宿泊セミナー)で学生達を鍛えたことが思い出として残っています。

ところで、アメリカにはアメリカ学術会議協議会(American Council of Learned Societies)というのがあり、それが研究者を招聘するというプログラムがあります。この協議会が招聘してくれた研究員はアメリカの学会では非常に高く評価され重要視されていて、招聘研究員の証明書があると外部秘のような貴重な研究資料でも自由に閲覧できますので、このプログラムは研究者にとっては大変役に立つものなのです。そのプログラムに私も応募いたしましたら、京都の「みやこホテル」まで出て来てくれという連絡がありました。そこで Interview を受けた際、アメリカに来るときには「是非家族も連れて来てください。家族の滞在費も出すことになっているから。あなたが研究をしている間に、家族はアメリカの生活を体験してほしい」と言われ、家族全員でアメリカに渡りました。1974年9月から75年6月にかけて、アメリカ学術会議協議会招聘研究員として、アメリカのヴァージニア大学に招かれることとなりました。当時、娘は中学校の2年生でしたけれども一緒に連れて行きましたが、ヴァージニアは南部で、黒人英語ですから英語がわからなくて困っていましたが、そのうち慣れて英語にも困らなくなりました。家内の方は困ることもありませんでしたが、生活の上では娘が通訳をしてくれまして、なんとか

生活に支障はなくなったようです。やはり、外国語の習得には実際の生活の場に入ることが大切だなあ、ということを感じました。その後、1980年9月から81年2月にかけても、再度、アメリカ学術会議協議会招聘研究員としてヴァージニア大学で研究にいそむことができました。そういうわけで、私はアメリカとの関係でも大変すばらしい出会いをさせてもらいました。

それから、1985年4月から1986年9月の間、島根大学国際交流主事（初代）となり、学長と共に国際交際のおぜん立てに一生懸命努力いたしました。

3. 学生

学生との出会いも非常に有意義でありました。私が島大教官になって2年目くらいの時に、英文専攻の卒業生が県立赤来高校の新任教員になり、4月に私に礼状を送ってくれたことがありました。その文面を見て、自分のような新米教師にもこれほどの信頼と敬意も持ってくれていたのかと思い、自分の仕事への責任感が一層強くなると共に、おおいに励みにもなり頑張らんといけないなあということを感じました。その手紙は今でも私の宝物として大切に保存しています。このように、大人との出会いだけでなく、学生さん達との出会いも、私の人生に非常にプラスになった、ということをお伝えしておきたいと思います。

VII. 八雲会

以前から松江市の八雲会には大変お世話になっております。特に、2020年6月に『ラフカディオ・ハーン 西田千太郎 往復書簡』を八雲会から発行することとなりましたが、この出版が実現するにあたっては、八雲会事務局長・内田融氏と『へるん』誌編集担当の村松真吾氏のお二人に大変お世話になりました。まず、ハーンの手紙150通のテキストを、日本やアメリカ国内すべてから内田氏と村松氏が集めてくださり、それを私が翻訳することになっておりましたが、実際は翻訳をしながら村松氏にいろいろと相談に乗ってもらって、ようやく出版が実現したものであります。この訳本は、内田氏と村松氏のご協力がなければ決して上梓できなかった本であり、まさに「3人6脚」でできあがったものであります。お二人のご厚意に心から感謝しております。

VIII. 島根大学ラフカディオ・ハーン研究会

島根大学ラフカディオ・ハーン研究会というのは2006年に発足し、もうだいたい16年ばかり続いております。始めから会員になっていろいろと勉強させていただいておりますが、この研究会は最近5、

6年特別なイベントをやっておりませんでした。最近になりまして役員会のほうでなんかやったほうがいいだろうというお話になったようですが、いろいろな検討をされた結果どうもいい話がなくて、結論としては会員のなかで一番年寄りの常松に何か話をさせようと、どうやら会員のなかにはですね、90年も生きたあの男の素性を知りたいという興味を持った人がかなりいらっしゃるようで、結局ある日ですね、吉川前会長が事務局長を伴ってわざわざ私の家にお越しになりまして、何でもいいから話をしてくれと懇願されまして、とうとう断り切れなくて、この場に今日座っているような次第でございます。

IX. 英語との出会い

私のいろいろな出会いは、英語という言葉を通してでありました。やっぱり、言葉による出会いが私を育ててくれたなあ、と思っています。英語と出会うことによって、恩師の先生方や様々な人々と貴重な出会いができ、人生が豊かなものとなったなあ、英語という「ことば」が私を育ててくれたのだなあ、とつくづく感じております。「英語との出会い」は私にたくさんの“Chance”を与えてくれました。それは大変ありがたいものであります。すべての出会いのきっかけは「英語」すなわち「ことば」でありました。今でも、私は家で、英語のニュースを聴いたり、*Time* や *The Japan Times* などを読んだりして楽しんでおります。英語は老いの生活に楽しみをもたらしてくれています。

X. フロアからの質問に答えて

1. ヴァージニア大学でのことをもう少し教えてください：

ヴァージニア大学にはバレットさんという卒業生がいて、その人の財力で集めたアメリカ文学者500人の貴重な自筆原稿などの「バレットコレクション」が保存されておりました。私の研究対象であるスティーヴン・クレイン関係の資料もあり、私も、大いに利用させていただきました。また、たまたま私がヴァージニア大学に行っていた頃は、大学で丁度スティーヴン・クレインの全集を作っている時で、私もスティーヴン・クレインに関してあれこれ意見を述べたら、「Masao Tsunematsu には大変お世話になった」と全集の最終巻の後記に、その全集の編集長バウアズさんが2行ばかり謝辞を述べられていて、大変びっくりいたしました。

2. 現在、学生たちが留学を躊躇する傾向がありますが、先生はどう思われますか：

アメリカにフルブライトで行ったとき、旅行をし

常松正雄先生出展の講演関係資料

2022.08.23~09.26

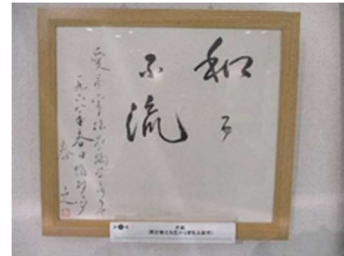
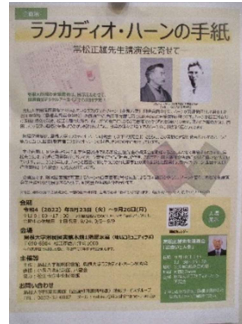
事務局長 横山 純子

てニューヨークの宿にいました。なにげなく、警察官が駐車場の管理をしているのを窓から見ていたら、指示に従って車を止めたドライバーに対して、警察官が「サンキュー」と言いました。当時（昭和31〔1956〕年）は、日本では、警察官が市民に対して「ありがとう」なんていった時代ではありませんでした。その時、アメリカはやっぱり民主主義の国だなあと感じました。だから外国に行きますと、日本では味わえないことを実感として感ずるんです。やっぱり、今の学生の皆さんも、世界は狭くなっているの、思い切ってアメリカだろうがイギリスだろうが、是非、出かけて行っていただいて、外国でしか味わえないことを是非学んでほしいなと思います。そして、外国で生活することによって貴重な経験をしてもらいたいと思っています。

「常松先生講演会アンケート」 に寄せられた回答より（抜粋）

1. 先生の戦時中からの勉強の軌跡がよくわかり、印象深い講義でした。
2. 謙虚で寛大なお人柄に触れることが出来、とても有意義でした。
3. 常松先生のお若い頃の島根師範学校や島大の文理学部のお話などとても貴重な興味深いお話でした。また、かつて ESS に所属していましたので、常松先生が初代会長でおられた話を知り、喜ばしく思いました。フルブライトのお話も興味深かったです。ありがとうございました。
4. 人の歩みの素晴らしさ貴重さを痛感した。
5. 私は（島根大学ラフカディオ・ハーン研究会）学生会員で、お恥ずかしながら常松先生のお名前を今回初めて知りました。しかし、最後まで全く飽きることなくお話を聞くことができ、当時授業を受けていた学生さんがうらやましいと思いました。私は将来的に英語教員になりたいと考えていますが、「外国語は生活である」というお言葉にとっても共感しました。受験のためではなく使うために授業をしたいと改めて思いました。
6. Big impression to me. Foreign language is a life itself. Encounter gives us wonderful chance for the future.
7. 常松先生と恩師との出会いが宝物として血肉になっていることとても印象的でした。
8. 若々しい講演すばらしかったです。2回も米国で研究され、学会から招かれたとはすごいです。八雲会への貢献有難うございました。
9. Wonderful Lecture! Wonderful Speaker!
Your words really do rejuvenate me. Thank you so much for making it available on zoom.

今回、研究会と講演広報のために講演に併せて展示を行うことを考え、島根大学附属図書館の協力を得て同館の展示室において実施した。附属図書館からは同図書館所蔵のハーン関係貴重資料であるハーンの西田千太郎宛直筆書簡 20通余り（常松先生の翻訳を添えて）及びその他の貴重資料を展示していただいた。それらに合わせて先生からは以下の資料を 45 点出展していただいた。ここでは常松先生が出展された島根大学ゆかりの英語の先生方の珍しい資料について述べる。



例えば色紙 3 点。佐川春水（雨人）先生(1878-1968)の俳句の色紙、ハーン研究者でもある森亮先生が、昭和 33 年 7 月に、常松先生が撮影された写真に対して書かれた詩「自画像」の色紙、同じくハーン研究者である梶谷泰之先生(1904-1997)が 1968 年に「和而不流」と書かれた色紙を出展された。



また興味深い昔の写真も数々出展された。左の写真は常松先生が撮影された昭和 34 年 2 月の島根大学文理学部英文研究室での恩師佐川春水先生の写真である。当時個室はなく、6 人一緒であったという木造の研究室の様子が趣深く感じられる。



そしてノート類では、常松先生が大変大事にされている恩師の佐川春水先生の英作文講義ノート 7 冊（うち 4 冊は紐で結わえてある）、俳句・英作文などいろいろなことを書き溜めたノート 8 冊（うち 2 冊はくっつけられ一冊になっている）を出展された。細かい字でびっしりと書かれていて、例えば、英作文講義ノートでは、左の

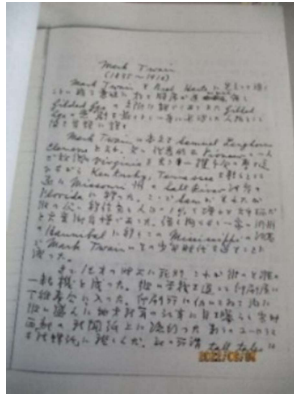
頁に授業で練習に取り上げた 10 余りの英作文がびっしりと書かれ、右の頁に教材として取り上げた井上靖著『氷壁』等からの文章の原文と訳したものが書かれ、英作文の授業の様子が窺われる。

また春水先生の御令息の佐川洋先生(1907-1974)



に関する資料では、写真と一冊に纏められた黄色の表紙のノートを出展された。左の写真は常松先生が撮影された同じく昭和 34 年 2 月の島根大学文理

学部英文研究室での佐川洋先生の写真である。また前述の黄色い表紙のノートは、佐川洋先生の「英作文(昭和廿七前期)」「英作文(昭和 37 后期)」と表紙に記された英作文ノート(この 2 つのノートについては森悟「佐川洋の英作文講義: 2 冊のノートより」に詳しい)、



U. S. Literature (V)、*U. S. Literature* (VI)と書かれたアメリカ文学ノートなど計 7 冊のノートのコピーを所収している。*U. S. Literature* (VI)で、例えば Mark Twain (1835-1910) のことが 9 頁にわたり記され、左の写真の頁では、「Gilded Age の名付け親でありまた Gilded

Age の悲劇を最もよく一身に具現した人物」なので Bret Harte(1836-1902)より先に説く旨が書かれている。1965 年 4 月、佐川洋先生と常松先生とで島根大学のアメリカ文学科を立ち上げられ、アメリカ文学史の講義の方は佐川洋先生が担当された。ノートはその授業をたどる貴重な資料と思われる。

常松先生にフルブライトを受けるように勧めてくださった Berthold Aronstein 先生(1910-1986)に関して、1985 年 10 月の 75 歳の誕生日を迎える 2,3 日前の写真と常松先生にあてた手紙が出展された。この英文の手紙には先生の名前や学生の名前が漢字で書かれていて心温かい人柄が偲ばれる。

その他、常松先生の蔵書・常松先生の論文「『ホワイロムヴィル』の子どもたち—ステイーヴン・クレインの場合—」が所収されている松村昌家編『子どものイメージ: 十九世紀英米文学に見る子どもたち』(英宝社、1992 年)など 4 冊、書簡集の校正刷り、オハイオ州立ケント大学教育修士号の学位記、常松先生所蔵資料など様々なものが出展された。講演と展示が一体となりいい展示になったと思う。

参考文献

森悟「佐川洋の英作文講義: 2 冊のノートより」『日

【学生のエッセイ】

ハーンが愛した景色を追って

根本 太一

(教育学部保健体育科専攻 3 年)

私はラフカディオ・ハーンがかつて愛した町松江市に生まれ、島根大学の教育学部保健体育科専攻に入学した。加えて外国の文化や言語にも興味があったことから英語の免許も取得したいと思い、ハーンについての授業を履修することになった。今までハーンについては小・中学校の授業で少し学ぶくらいで大学に入っても専門的に学ぶ機会は少なかったが、この授業を通じてハーンの足跡に興味をもつきっかけになった。

授業で松江市内を舞台とした紀行文“The Chief City of the Province of the Gods”(「神々の首都の国」)を原文で読んだ後、ハーンのゆかりの地を巡るという活動があり、調べていたところ松江市島根町にある「加賀の潜戸」という地に興味をもったので夏休みに訪れることにした。この地に興味をもった理由は長い時間をかけて作った素晴らしい景色はもちろん、子どもの霊をまつている場でもあると聞き、ハーンはどのようにこの景色を見ていたのかをこの目で見たかったからである。洞窟に船で潜入したときに透



き通るほどの海の美しさと岩の造形美に息を飲んだ。ハーンが「これ以上に美しい海の洞窟はそう考えられるものではない」と言っていた理由が分かった。いくつもの偶然と時間をかけてこの神秘的な洞窟ができ

たという事に自然の雄大さを感じた。またこれから何千年、何万年もかけて岩は削られ、さらに形が変化していくのだと考えると不思議な気持ちになった。

子どもの霊がまつられる場所につくと、数十体の地蔵様が置



かれる暗い洞窟があった。その地蔵様には車のおもちや人形など子どもが好きそうなモノがお供えしてあった。正直、怖さも感じたが、何年もこの地にお供えをもって来る方がおられることや、毎年お盆に供養をしに来るご家族の話などを船の人に聞き、家族の愛や絆を感じ、決して怖い場所ではないという事に気づかされた。ハーンはこういったことから着想を得て家族愛を感じられる作品を生み出したのではないだろうか。

怪談とともに楽しむ水燈路

菊田 緑里

(法文学部言語文化学科 4年)

前回のニューズレターで紹介した「聖地巡礼」以来、学生部の活動や常松先生の講演、附属図書館の展示など、日頃からハーンを意識するようになった。今回は、個人的に見つけて申し込んだ「島根県立大学学生が語るヘルン旧居 de 怪談」の感想を述べたいと思う。本イベントは、松江水燈路の開催日でもある10月中の3日間に小泉八雲旧居を貸し切って行われ、私は10月16日(日)の第2部を聴きに行った。回によって内容が異なるようで、私の参加回では「化け狐」、「小豆とぎ橋」、「耳なし芳一」、「消えぬ芸者の足跡」、「子育て幽霊話」の5つが語られた。松江観光協会や小泉凡先生の強いバックアップの元、学生たち自身で場を創っていた。

一番に感心したのは、ハーンが妻セツの語りを聴く状況を、語り部がセツ、客がハーンという形で再現していた点である。そのため工夫が2つ伝わってきた。まず、学生たちが自分の言葉で語っていたことである。怪談の前置きとして、かつてハーンがセツに向かって「本を見るいけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければいけません」と伝えていたエピソードが紹介された。そして、怪談本編は良い意味で大学生らしく、分かりやすい言葉遣いや、フレッシュな声のトーンで語られた。中にはオリジナルで挨拶を入れている人もいた。もちろん誰もカンペなんて持っていない。学生たちはまさにハーンの要望を実践していた。

次に、怪談を盛り上げるBGMのように、秋の虫がずっと鳴っていたことである。現在、小泉八雲記念館では「虫の詩 かそけきもの の音を愛す」という企画展が開催されているが、その展示によると、八雲は日頃から鳴く虫を飼い、書齋で熱心に観察し

ていたらしい。語り部の学生たちは、怪談の前に必ず一言「耳を研ぎ澄ませてお聴きください」と添えていた。それは話の内容だけでなく、虫の音にも集中してほしいという意図があったと考えられる。おかげでハーンに寄り添いながら、語りを存分に味わうことができた。

イベント終了後は、松江水燈路を観て回った。怪談を聴いた直後のため、夜道を歩くのが少々怖く感じたが、それもまた一興である。堀川沿いには「耳なし芳一」のように、琵琶を弾く者もいた。さらに、日中は初めて松江祭藝行列を観に行ったことも重なり、松江の伝統文化を満喫して幸せな1日を過ごせた。水燈路では、ハーンや怪談のイラストが描かれている行燈を9つも見つけた。いくつか見落としがあるとすれば、実際はもっと展示されていたかも



(画像：ハーンが描かれている行燈の1つ。城山稲荷神社や、ろくろ首が描かれているものもあった。)

しれない。世代を問わず、多くの松江市民がハーンを誇りに思っていることを実感した。私も研究会の一員として、残りの大学生活でハーンの魅力を広めることに貢献したい。

【学生部の活動報告】

子どもたちと小泉八雲を学ぶ

宮澤 文雄

(島根大学法文学部)

10月14日、学生会員の有志7名が、松江市立内中原小学校へ赴き、4年生の「小泉八雲学習」に学習ボランティアとして参加しました。きっかけは前号で紹介した「日めぐりへるん」に関心をもたれた図書館司書の藤井裕子先生からのお電話。そのご縁は後日、学年主任の福田悠紀先生からの「ぜひ大学生のお話を子どもたちに！」というお誘いへ発展しました。

授業でははじめに「小泉八雲の〇×クイズ」をやりました。子どもたちが楽しく学べるようにと学生

たちが発案しました。例えば、「八雲は卵料理が好きだったかどうか」というクイズでは、ただ正解を伝えておわりではなく、八雲は毎朝の食事に卵と牛乳を欠かさなかったことや当時では珍しかった目玉焼きをわざわざ作ってもらっていたことなど、八雲に親しみを感じてもらおうエピソードを紹介しつつ、当時の松江の食文化についても解説しました。

また、記念館に展示されている鉄アレイから着想を得た「八雲は筋トレをしていたかどうか」というユニークなクイズでは、泳ぐことがとにかく好きだったことを連想させるだけでなく、良質なたんぱく質（プロテイン）を含む先ほどの卵や牛乳のエピソードと関連付ければ、八雲の健康志向に気づかされます。子どもたちも自由な発想で、自分なりの八雲像を思い描いたことでしょう。正解が発表されたときの体育館いっぱいに響いた子どもたちの歓声、大学生の話聞きのがすまいと一生懸命にえんぴつを走らせていた姿は、いまでも心に残っています。

つぎに、大学生たちは、自分が八雲に関心をもったきっかけや学んで印象的だったことを話しました。子どもたちの目はまっすぐ、話している大学生に向けられていて、いつの間にかお互いの距離が縮まっているようでした。



さいごは、組ごとにわかれて子どもたちの質問に答えました。どの組でも思いがけない質問の連続。しかし答えられない質問であっても、子どもたちと真摯に向き合い、興味関心を伸ばすような応答をどの学生も心がけてくれました。どんな質問があったか、少しだけご紹介しましょう。「八雲さんにはどうして名前がたくさんあるのですか?」「セツさんとはどうやって知り合ったのですか?」「松江にはどんな経路で来ましたか?」「怪談は全部でいくつありますか?」「八雲さんの怪談は実話でしたか?」「政治に関わっていましたか?」など。さて、あなたはいくつ説明できたでしょうか。その場で答えられなかった質問には、後日きちんと答えました。

この総合学習がおわる頃、子どもたちの小泉八雲の呼び方も「八雲さん」から「ヘルンさん」に変わっていることでしょう。内中原小学校の温かい先生

方のご指導のもとで、子どもたちがどのように成長していくのか、今後も目がはなせません。そんな子どもたちと「学び合えた」ことは、学生たちにとっても得がたい経験になったに違いありません。それでは「もう一人の主役」たちの声をご紹介します。

「八雲を通した気づき」

浅野 栞菜／法文学部言語文化学科 2年

子どもたちを相手に八雲のお話をするのは新鮮で、普段の活動ではあまりない体験でした。子どもたちの学ぼうとする姿勢は素晴らしく、質問コーナーでは手をたくさん挙げて聞いてくれたことが印象的でした。今回の交流会を通して、八雲を子どもたちに知ってもらっただけではなく、自分にはなかった視点から見た八雲にも気づくことができたと感じます。このような価値観の共有を、今後の活動の中にも取り入れていきたいと思いました。内中原小学校4年生と教職員の皆様、貴重なお時間をつくっていただきありがとうございました。

「知りたい気持ち」

陰山 悠華／法文学部社会文化学科 2年

カラコロ広場に後ろ姿が埋め込まれている顔の見えないこのモニュメントは一体誰なのか、そう思ったのは大学一年生の頃です。そこから八雲のことを調べるうちに研究会に縁があり、内中原小学校の皆さんと出会うことが出来ました。まっすぐな目で八雲について聞いてくる子供たちを見ると、うれしさと私も八雲のことを知りたい、そんな大学一年生の頃の私の気持ちもよみがえってきました。内中原小学校の皆さんに負けないよう、私も八雲のことを食欲に探究していこうと思います。

「学ぶ姿勢」

西村 栞奈美／法文学部法経学科 2年

私は「日めくりへるん」作成時からのメンバーですが、この間の内中原小学校での講演会で八雲についてスラスラと話せるだけの知識はまだまだだと気づかされました。しかし講演会で得た経験はそれだけではありません。子どもたちに八雲について親しみを持ってもらおうと企画したクイズ、質問の時間、全てにおいて八雲について詳しく知ろうとする子どもたちの姿を見て、私自身も初心に帰り八雲について学ばなければならないなと思いました。勉

強が忙しいことを言い訳になかなか研究会の活動に取り組めていないため、それが一段落したら自信をもって話すことができるように八雲について学び成長していきたいと思えます。

「ありがとう」

林 修蔵／法文学部言語文化学科 2年

今回のような小学校訪問は私が研究会に入会して初めてのことで、私自身とても心配でしたが、結果皆さんに楽しく学んでもらえて本当に良かったです。また、小泉八雲について、小学生の皆さんならではの鋭い質問をたくさんいただき、私達も学びのある充実した時間を過ごすことが出来ました。本当にありがとうございました。

「素敵な出合いを大切に」

山本 幸映／人間科学部人間科学科 2年

今回小学校を訪問して、子どもたちがクイズに積極的に参加してくれたり、質問をたくさんしてくれたりしたことが何より嬉しかったです。また、八雲に関するクイズを考えたり、子どもたちからの質問に答えたりした時に、八雲についてまだまだ知らないことばかりだということに改めて気付かされました。私も子どもたちと一緒に、これまで以上に八雲に興味をもって色々を知っていきたくです。そして、私自身とても楽しい時間を過ごすことができたので、このつながりを大切にして、また子どもたちと交流できたらいいなと思えます。

「広がる縁」

吉田 怜夏／法文学部言語文化学科 2年

実は元々この小泉八雲の活動を始めたとき、メンバーが私と浅野さんの2人しかいませんでした。私が「日めぐりへるん」をつくりたいと思ったときも、最初は“仲間集め”から始まりました。なんだかルフィみたいですね。そこからどんどん縁が広がって行って、色んな人を巻き込んで、そして皆さんに会うことができました。キラキラしていてかけがえないご縁です。

内中原小学校の皆さん、今回は本当にありがとうございました。短い時間でしたがとっても楽しかったです。またお会い出来る日を心待ちにしております。その時はまた一緒に冒険をしましょうね。

【読書会の記録】

事務局長 横山 純子

第148回例会

2022年6月11日(土) 13:30~15:30.

松江国際交流会館3階第二研修室 参加12名
“Some Fairy Literature,” pp. 328.21-330.6.

第149回例会

2022年7月9日(土) 13:30~15:30.

島根大学法文学部三階多目的室3 参加10名
“Some Fairy Literature,” pp. 330.4-331.17.

第150回例会

2022年8月20日(土) 13:30~15:30.

島根大学法文学部三階多目的室3 参加10名
“Some Fairy Literature,” pp. 331.19-334.4.

第151回例会

2022年9月10日(土) 13:30~15:30.

島根大学法文学部二階多目的室1
常松正雄先生講演会「出会いと人生」
会場参加 会員18名 一般23名

Zoom 参加 会員2名 一般22名

会場アンケート回答 19名

オンラインアンケート回答 6名

メールで感想を寄せてくださった方 3名

今回初めてオンライン併用での講演会をしましたが、アンケートに *inspirational* な講演だった等の感想をお寄せいただきました。また講演に併せて島根大学附属図書館展示室で展示(8月23日~9月26日)も行えて良かったと思えます。お世話になった図書館の方々、参加してくださった皆様、手伝ってくださった方々、どうもありがとうございました。

第152回例会

2022年10月8日(土) 13:30~15:30.

松江市国際交流会館二階和室 参加10名
“Some Fairy Literature,” pp. 334.5-337.35.

第153回例会

2022年11月12日(土) 13:30~15:30.

松江市国際交流会館第二研修室

2022年度総会 & 月例読書会

“Some Fairy Literature,” pp. 335.36-337.35.

総会において吉川進前会長に代わって渡部知美先生が新会長に就任されました。島根大学ラフカディオ・ハーン研究会は四年後に20周年を迎えます。

編集後記：常松先生講演会の特集号です。また学生会員の皆様には、華を添えていただきありがとうございました。みずみずしい感覚は、この会への素晴らしい貢献です。すべての皆様、本当にありがとうございました。(高橋栄)